

## 同志社のルーツ、アーモスト大学 —リベラルアーツ教育の再生を願って—

講演	森田 雅憲【もりた・まさのり】
講師紹介	同志社大学商学部教授
研究テーマ	社会と経済の境界分野に関する理論的研究

### アーモスト大学とは

函館から脱出した新島が、ハーディー氏の手厚い庇護の下でフィリップス・アカデミー、アーモスト大学そしてアンドーバー神学校で教育を受ける機会を得たことは、同志社にかかわる人々にはよく知られた事実である。とりわけシーリー教授との交わりをはじめとしてアーモスト大学での教育や生活は、若き新島にとってかけがえのない精神的財産となった。本日はそのアーモスト大学と、それが目指しているリベラルアーツ教育をテーマに選び、大学でまず学ぶべきことを考える一助としたい。

ボストンから内陸に向かって車で2時間少々走ると、ニューイングランドでもひととき瀟洒な田舎町アーモストにたどり着く。町全体が森の中に埋もれていると言っても過言ではないくらい豊かな自然に抱かれているが、その中心部のひとときわ小高い丘の上にアーモスト大学がある。学生数1600名の小さなリベラルアーツ・カレッジである(資料(1))。

わが国ではアイビーリーグのハーバード、イエール、プリンストンや中部のシカゴ、西部のスタンフォードなどの大学ならおそらく誰でも知っているが、アーモスト、ウィリアムズ、スワースモアといったリベラルアーツ・カレッジの名前を知っている者はわずかであろう。我が同志社にあって、アーモスト大学の名前さえ知らない学生に出くわすことは珍しくない。

無理もない。大学の教員が在外研究先に選ぶのは大抵大学院を擁した有名大学であり、大学院もなく学部教育に特化したリベラルアーツ・カレッジなどはもとより選択の対象になっていない。したがって、大学で学ぶ若者が自分たちの先生から得る大学の情報はそうした大学に関するものがほとんどであり、結果的に、学生たちの留学先も大学院を擁する有名大学に偏る傾向が見られる。

昨今、なんでも格付けする悪しき風習が世界的に蔓延しているが、大学もご多分に漏れずランキングの対象となっている。アメリカの大学ランキングとしてよく引き合いに出されるものにU. S. News & World Report誌が毎年公表しているランキングがある。そこではNational UniversitiesとLiberal Arts Collegesの二つの部門に分けてそれぞれ別個にランク付けしている(注1)。2015年のランキングでは、前者はプリンストン、ハーバード、イエールの順に1位から3位、コロンビア、スタンフォード、シカゴは同率で4位となっている。後者は、ウィリアムズ、アーモスト、スワースモア、ウェルズリーの順に1位から4位となっている。そしてこうしたランキングの上位は、例年、常連メンバーで占められており、それらの間での順位に変動はあっても、メンバーが大きく入れ替わることはほとんどない(注2)。

これを見て分かるのとおり、リベラルアーツ・カレッジとしてのアーモストの評価は極めて高いことが分かる。だが、ハーバードやプリンストンなどの名門校とは比較の対象にさえならないのではないかと訝る人もいるのではないだろうか。実際、教育理念や目的の異なる二つのカテゴリー間で比較をすること自体にどれだけ意味があるか大いに疑問のあるところではあるが、受験生の間での「人気度」という物差しでなら、そうした比較もあるいは可能であろう。

めったにその種のデータは目にするのではないのだが、NBER(全米経済研究所)のワーキング・ペーパーに、そうした比較を試みたものがある(注3)。2004年に公表されたものであり、データは多少古いが、参考までにその結果を紹介しておこう。このランキングは、いわゆる「勝敗率」を基に作成されたものである。つまり、たとえばハーバードとアーモストを両方合格した受験生のうち、実際に入学した数が多い方を上位とする方式である。

資料(2)の表は上位20位までの結果である。アーモスト大学は9位にランクされている。大学院をもたない学生数1600名の小さな大学なのに、大健闘ではないか。実際、ハーバードやイエールなどとアーモストの両方を合格した受験生のうち、少なくない数の学生がアーモストを選んでいるのである。なぜだろう。研究重視の大きな大学でも学部でリベラルアーツ・コースを設置しているところは多いが、専任教員が学部学生を直接教えるのは、たとえば週3クラスある科目の場合、一度か二度で、あとはTAたる大学院生が教えるという形が多い。教員は、研究者として業績を上げることが第一目標であり、学部教育にはあまり熱心でないとされている。また、受講生が数百人の大規模クラスも珍しくない。それとは対照的に、リベラルアーツ・カレッジでは大学院生がいないため、原則として毎時間、専任教員が授業を受けもつ。また学生数が少ないことから平均的なクラス規模も10人台といったところが多い。必然的に、学生と教員との距離は大規模校とは比較にならないほど近い。かつ寮生活を4年間共にすることから、学生同士で非常に密な人間的交流ができることもリベラルアーツ・カレッジの特色である。それゆえに、受験生の中には、たとえばハーバードとアーモストに両方合格しても、そのような充実した学部教育を求めて、あえてアーモスト大学を選ぶ学生が結構いるのである。アーモストでしっかり学部教育を受け、専門的な研究は卒業後にハーバードやイエールの大学院で、というコースはアーモストを卒業していく学生にとってメジャーな進路選択となっている(注4)。

### アーモスト大学における新島の評価

ここで新島とアーモストの関係に話を戻そう。新島がアーモストでどのような感化を受けたかということについては、他の文献に任せることとし(注5)、アーモスト大学における新島に対する現在の評価を推測できるようなエピソードをいくつか紹介したい。

アーモスト大学のシンボルであるジョンソン・チャペルのホールの四周の壁にはアーモストにゆかりのある著名人のポートレートが掛けられている。新島に多大な影響を与えたシーリー教授でさえ後ろの方にひっそりと配置されているのに、新島のポートレートは正面に向かって右という最高に目立つ場所に掛けてある。長らく向かって左には、アーモストが輩出した唯一の大統領であるカルヴィン・クーリッジのポートレートが掲げられていた。2013年に、ほとんどのポートレートの配置が変更された。クーリッジ大統領の場所を占めたのは、1962年にアーモスト大学でデニシア・トラックの女性教員として初めて採用されたローズ・オルバー(心理学専攻)という人である(注6)。だが、新島のポートレートは別格の扱いで、今なお正面右に配置されたままである。第二次世界大戦中に、日本はアメリカの敵国だという理由で新島のポートレートを降ろせという声は一切起きなかったという有名なエピソードがあるが、今回のポートレート再配置は、新たなエピソードとして語り継がれていくのではないだろうか。

アーモスト大学の公式ウェブサイトにA History of Amherst Collegeというページがある(資料(3))。そこにはたった3名の人物しか登場しない。ノア・ウェブスター、エドワード・ジョーンズ、そしてジョセフ・ハーディー・ニージマである。辞書編纂で有名なウェブスターは、アーモスト大学の設立に尽力した一人である。ジョーンズは、アーモストを卒業した最初のアフリカン・アメリカンであり、シエラレオネに定住しキリスト教主義学校の校長となった。新島は言うまでもなく、アーモストを卒業した最初の日本人である。これら三人は、いずれも教育に深くコミットした人たちである。教育による社会貢献を重視するアーモスト大学にとってみれば、こうした人たちこそTerras Irradiant(彼らをして世界を照らしめよ)というアーモスト・スピリットの具現者ということになるのであろう。同志社の建学の精神である良心教育は、「良心を手腕に、地の塩、世の光として活躍できる人物の育成」を標榜しているが、これはまさにアーモスト・スピリットに通底するものである。

資料(4)の写真は、卒業生から寄付を募ることを目的として2008年に実施されたLives of Consequenceというキャンペーンのパンフレットの表紙である。ここには、アメリカを代表する詩人口パート・フロスト、アフリカン・アメリカンの19歳でアーモスト大学を首席で卒業し、その生涯を人種隔離政策の撤廃にささげたチャールズ・ヒューストン、ニューヨークのホームレスを支援する事業を立ち上げたロザンヌ・ハガティなど、多大な社会貢献を成し遂げた人たちが選ばれている。そして新島も、その中に含まれている。こうした社会に献身的に貢献する人々を輩出することがTerras Irradiantという教育理念を掲げるアーモスト大学のミッションであり、そのような教育事業をよりいっそう推し進めていくために財政支援を求めているのである。

このようなキャンペーンを行った背景には、折からの世界金融危機で多額の損失を大学が被ったという切迫した事情もあったのであろうが、アーモスト大学を巣立っていく学生たちができるだけ社会貢献に役立つような進路選択をできるようにとの願いが込められているのである。周知のようにアメリカの私立大学の学費は極めて高額で、多くの学生は教育ローンを組んでその学費を払わざるを得ない。卒業時には200万円、300万円といった高額の負債を抱えているのである。そしてその負債は、卒業後一定期間内に返済しなければならぬ。そのため、学業成績の優秀な学生の多くが、たとえばヘッジファンドのような高報酬の企業に就職する傾向が見られたのである。中学・高校の教員やTeach For America(注7)への参加、あるいはコミュニティー・オーガナイザーなど草の根レベルで社会に貢献するような地道な進路は、負債の返済という点では不利なのである。

こうした職業選択に与えるバイアスを解消するために、アーモスト大学は主要な奨学金のすべてを貸与から給付に切り替え、卒業時に負債を背負わなくても済むようにしようとした。そしてWall Streetではなく、公共性・社会性の高い仕事に就くことを奨励したのである。やがてはエドワード・ジョーンズや新島のように、社会に大きな貢献をなす事業にかかわる若者の登場を待望しているのである(注8)。同志社小学校が修学旅行で初めてアーモスト大学を訪問した時、歓迎のスピーチでマークス学長(当時)は次のように子供たちに語りかけた。

More important than what he took back to Japan is what Neesima left behind in America. Amherst changed Neesima, but he also changed Amherst forever and for the better. (Anthony Marx, at Johnson Chapel, June 10, 2010)

いまなお新島は、同志社のみならずアーモストにとっても大切なロール・モデルなのである。

### リベラルアーツ教育が目指すもの

ここでリベラルアーツ・カレッジが実践する教育が目指すものについて瞥見しておこう。以下は、アーモスト大学に開設されている学科の一覧である。

American Studies、人類学、アジア言語文化、天文学、生物学、Black Studies、化学、古典、コンピューター科学、経済学、英文学、European Studies、美術史、フランス文学、地質学、ドイツ文学、ギリシャ文学、歴史学、ラテン語、法学、政治学、数学、音楽、Neuroscience、哲学、物理学、政治学、心理学、宗教学、ロシア文学、社会学、スペイン文学、演劇・舞踏、Gender Studies

この中には、日本の大学にはあるような学部・学科のいくつかが含まれていない。たとえば経営学、医学、法律などが見当たらない。これらは実践的な学問であり、人間性を陶冶する教養教育にはなじまないとの判断があるのである。そうした技能的知識はビジネス・スクールやメディカル・スクールなどの専門職大学院で学ぶべきもので、それ以前に、人間としての素養（人間や社会についての深く考慮する力）を修得すべきだという理念に裏打ちされているのである（注9）。こうした基礎こそは、グローバル化し、価値観や世界観の異なる人々が日常的に接する現代社会において、最も必要とされる知恵・知識ではないだろうか。だからと言って哲学や文学だけをやっていたらよいとは思わない。それ以外の学部であっても、専門を教えるのではなく、専門で教えるという構えが不可欠なのだ。

ところでそうした人間的基礎は、決して講義や文献だけから学べるものではない。頭で理解しているだけでなく、生の人間関係の中で学び取っていくことも欠かせない。そのため、アーモスト大学をはじめ、多くのリベラルアーツ・カレッジは、構成員の多様性ということを重視して教育環境を創り上げようとしている。人種多様性、民族的多様性、経済的バックグラウンドの多様性、宗教的多様性など、実にバラエティーに富んだ学生・教員集団を構成するよう努力しているのである。それによって教員からだけでなく、学生同士がお互いに学び合うことを重視している。

なかでも、全世界的に進行しつつある格差社会の中で、経済的バックグラウンドに恵まれない階層からの学生のリクルートはもっとも重要な課題の一つとなっている。名門私立大学で学ぶためには極めて高額な学費がかかる。アーモストの場合、寮費などを含めると年間500万円以上になる。加えて入試の可否に大きく影響する中学・高校時代のさまざまな課外活動を経験しておくために多額の経費がかかる。このような高額な費用負担をできる家庭はアメリカでも限られている。

言うまでもないが、名門私立大学を卒業すれば待遇の良い仕事に就ける確率が高い。したがって、裕福な家庭に生まれた子どもは、名門私立大学に進学することができ、卒業後は高給の仕事に就いて、さらに自分の子どもを名門大学に通わせることができるという閉じたサイクルが出来上がり、それが社会階層の流動性を著しく阻害している。それとは対照的に、貧困層の家庭に生まれた子どもは、十分な教育を受けることができず、したがって低い賃金の仕事に甘んじざるを得ない。その結果として、自分の子どもにも十分な教育を受けさせることができず、貧困から抜け出せないというトラップに陥ってしまう。まさに教育が経済的格差を温存する社会的装置に成り果てているのである。そのような状況の中で、良き意味で社会のリーダーたることが期待されているエリート学生が、自己利益の実現を第一目標として進路選択をする傾向が見られるのである（注10）。これではTerras Irradiantという教育理念に反することになる。

先に触れた奨学金を貸与から給付に制度変更したい一つの理由がここにある。相対的に所得水準が低い家庭から優秀な学生をリクルートするためには、大学による手厚い経済的支援が不可欠である。実際、アーモスト大学に在籍している学生の約6割が何らかの経済的支援を大学から受けている。そのおかげで、名門エリート大学と思われているアーモスト大学には、低所得層の家庭から多くの学生が進学している。たとえば親の年収が200万円未満という、我が国でも最貧困層に分類されるような家庭から入学した学生数は6%に上る。また、年収600万円未満の家庭から進学してきた学生の割合は約15%である（注11）。

こうした貧困層の学生にも第一級の教育環境で学ぶ機会を与える制度は、大きな成果を生んでいる。最近におけるその典型例が、次に述べるアンソニー・ジャック氏のケースである。彼は、フードスタンプ（無料食料クーポン）を使わなければならないような貧しい母子家庭で育った。母親は地元の学校で清掃の仕事に携わっており、息子を名門私立大学に進学させることなど夢だにできなかったに違いない。だが、高校で素晴らしい成績を修めたアンソニーに対し、アーモスト大学は、破格の給付奨学金を与えて入学させた。彼は期待に応えてアーモスト大学を優秀な成績で卒業し（cum laudeを与えられている）、その後ハーバード大学大学院に進み、現在は社会学で博士論文を書いている（注12）。すでにいくつかの論文も刊行しており、2016年にはPh.D.が授与される予定である。彼のことはNew York Times誌をはじめいくつかのメディアで取り上げられ、全米から注目を浴びた（資料（5））。今後も彼に続く学生が次々に巣立っていくことを願ってやまない（注13）。

## リベラルアーツ教育の再生を願って

多様性を重視し、経済的支援を強力に進めるアーモスト大学の教育改革は全米でも注目されており、ハーバードやプリンストンなど伝統的名門校がそれに倣って大学改革を進めている。こうした背景には、アメリカにおけるエリート教育への痛切な反省がある。つまり、経済的格差を温存する社会的装置として高等教育が機能しているという事実、多くの大学が目を見出しつつある。若者や彼らの父母の間で、社会的成功のための名門大学への進学という、悪しき目的合理的発想が蔓延し、それに役立つ実利的・技術的・専門的知識を追い求め、人生の意味・望ましい社会の実現・生涯を通じて追求すべき価値といったものをめぐる、内省的思考を深めることに時間を割こうとしない風潮が広がっていったのである。だが、これらこそ大学において真に学ぶべきものであり、そのためのリベラルアーツ教育であったはずである。経済的格差が最大の社会問題とも言えるアメリカにおいて、いま、再びリベラルアーツ教育の重要性が見直されているのは、社会の健全な自己免疫反応であろう（注14）。

残念ながら、我が国でも「役に立つ知識」への指向は時とともに顕著になっているように思う。たとえば中央教育審議会は、すでに設置されている学部・学科を職業教育学校へと転換することが可能な制度を2019年度から実施しようとしている。また文科省が昨年9月に各大学に発した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」という通達では、教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきではないか」とある。大学とは知的play ground、すなわちさまざまなノルムから解放されて人間や社会について自由に考える場所で良いと私などはずっと思っていたが、いまや、大学は道具として使える知識を教える場所になるべきだと言われているのである。道具を使って何を誰のために作るのかということを一ひとりに考えさせ、そうした道具を誤用・悪用しない使い手を育てることこそが最優先課題と思われるが、そうしたことはニーズがないという理由で軽視され、もっぱら道具の使い方を教えることを旨とせよというプラグマティックな考えが支配的になりつつあるように思われる。だが、道具の使い方しか知らない者は、えてして自分自身が他の人の道具になりがちであり、しかもそのような状況に本人が気づいていないことが多い。このような人生はいかにも悲しい。だからと言って道具を使うための知識が無駄だと言いたいのではない。その前に、考えておくべきことがあるはずだと言いたいのである。それさえしっかり見定めることができれば、道具の使い方などちょっとしたアドバイスがあれば、自らの力でどんどん習得していけるはずである。

学生たちに「大学での学びが『役に立つ』とはどういうことか」と質問すると、「弁護士や会計士の資格を取ったり、あるいは公務員や大企業に就職するのに役立つこと」といった類の答えが返ってきがちである。つまり、自分が何かになるための道具としての学問というわけだ。だが、人生にとってより重要な問いは「何をするか」であって、「何になるか」ではない。「弁護士になって何をやるのか」、「公務員になって何をやるのか」こうしたことを問うことなしに、「社会的地位が高いから」、「給料が高いから」、「安定しているから」といった判断基準で進路を選択する傾向がありはしないだろうか。だが、大学での学びを、何かになるための道具という目線でとらえている限り、その本当の価値に触れることは難しい。まず考えなければならないのは、人生において「自分は何をやるか」である。だがそのためには、自分が何者かを知らねばならない。道具の使い方を学ぶためだけに大学の4年間を費やすとしたら、おそらくそれは回収不可能な浪費になるだろう。

Deresiewiczの表現を借りれば、いま大学は健康で従順なexcellent sheepを飼育する牧場になることを求められていると言えよう。実際、大多数の学生たちは、「柵」の中で少なくとも表面的には自己充足的に日々を過ごしているように見える。だが、このような時代だからこそ、大学は学生の魂を揺さぶる場として蘇らなければならないのではないだろうか。大学にかかわるステークホルダーの表面的なニーズばかりに気を取られて、顧客満足度を引き上げることを優先課題とするような学校になってはならない。そうではなく、大学の門をくぐるまでの18年間に染み込んだ判断基準や思考習慣といった「独断のまどろみ」から若者を覚醒させる義務が大学にはあると思う。そして「自分より大きな何か」に出会うチャンスを豊かに内包した時空間を彼らのために準備することが、最優先課題になってしかるべきではないか。

新島は「同志社二於て八個儻不羈なる書生ヲ庄束せし務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導す可し以て天下の人物ヲ養成す可き事」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』4 同朋舎出版 1989年）という言葉を我々に遺している。要するに、sheepはさておき、maverickを安易に柵の中に囲い込むようなことをせず、彼らの本性を生かして社会に貢献できる人物になるよう導けと教えているのである。これは実にリベラルアーツ教育のエッセンスを射抜いた言葉ではなからうか。また新島は「同志社は隆なる二従ひ機械的二流の恐れあり」（同）という警句も残している。ここで「機械的」とは、「時代におもねる」と読み替えることができよう。社会のニーズに無批判に迎合すること、すなわちリスクを回避して官僚的に物事を進めること、を彼は戒めているのだ。今日、これほど隆盛になった同志社において、新島の母校が実践しているようなリベラルアーツ教育を行うことが物理的に不可能なことは自明である。せめてリベラルアーツ教育が目指すところを北極星として、機械的に流れることなく、日々、教育実践の舵取りをしていくべきではないだろうか。

## 〔注釈〕

- 1 アメリカの大学は大きく二つのカテゴリーに分けることができる。一つはNational Universitiesであり、ハーバードやスタンフォード、UCLA、シカゴなど大学院を有する研究重視の大規模大学がここに分類される。いま一つは、大学院は設置せず学部教育に特化し、小規模でその多くが全寮制のLiberal Arts Collegesである。アーモスト大学は、もちろん後者に分類される。言うまでもないが、National Universitiesとは「国立大学」という意味ではない。
- 2 こうした傾向を悪しき合理化として一蹴することは簡単だが、実際に高校生の進路選択に大きな影響をあたえていることは否めない事実である。
- 3 Avery, C. M. Glickman, C. Hoxby and A. Metric “A Revealed Preference Ranking of U. S. Colleges and Universities”, NBER Working Paper 10803, Sept. 2004
- 4 アーモスト卒業後、5年以内に大学院に進学する者の卒業生全体に占める割合は約75%と高率である。卒業生の中にはノーベル経済学賞のE・フェルプスとJ・E・スティグリッツ、ノーベル生理学・医学賞のH・ヴァーマス、そしてノーベル物理学賞のH・ケンダーリッヒ。20世紀の理論社会学の最高峰と言われているT・パーソンズも卒業生である。また『ダ・ヴィンチ・コード』の著者であるダン・ブラウンもアーモスト大学を卒業している。
- 5 たとえば北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』山口書店 1993年を参照されたい。
- 6 <https://www.amherst.edu/news/memoriain/node/583975>を参照。  
なお、1962年に初めて女性教員採用という、遅いように思われるかもしれないが、当時のアーモスト大学は男子校であったことがその理由だと思われる。オルバー教授は、アーモスト大学を共学にする委員会のメンバーや、女性学・ジェンダー研究の学科を創設すべく設置された委員会の委員長も務めた。
- 7 大学卒業後に、非常勤講師として2年間アメリカの教育困難校で教えるNPOのプログラム。

- 8 このようなアーモスト大学の政策は全米で大きな注目を浴び、それに続いて多くの有名大学で同じような学生支援プログラムが導入された。アーモスト大学においてその動きをリードしたのは前学長のアンソニー・マークス学長である。彼自身も、大学院生時代に南アフリカにわたって貧困層の子どもたちの学習を支援する学校 (Khanya College, 1986年設立) の創設に尽力した経験をもっている。
- 9 Bachelor of Arts (BA) とは、本来、こうした実学的でない学科を学んだことに対して与えられる学位である。
- 10 エリート学生が、金融など高収入に直結する分野へ就職する傾向は、世界金融危機の後でもなお見られるという。2010年にはハーバードの卒業生のおよそ半数が金融やコンサルティングの会社に就職している。こうした傾向はペンシルベニア、コーネル、プリンストン、スタンフォード、MITといった大学でも見られる。William Deresiewicz著、Excellent Sheep-The Miseducation of the American Elite and the Way to a Meaningful Life, Free Press, 2014, p.17を参照されたい。この著作については、George Scialabba「米エリート大学の嘆かわしい現実—失われた人間教育と格差の拡大」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』日本版2015年5月号で取り上げられている。またこのScialabbaの論文が「池上彰の大岡山通信 若者たちへ(46) すぐ役に立つ大学」『日本経済新聞』(2015年5月25日)で紹介されている。
- 11 アーモスト大学では400名強の学生が年額400万円以上の経済的支援を受けている。
- 12 <http://scholar.harvard.edu/anthonyjack/home>を参照。
- 13 一般的な現実とは、それとは逆に一層厳しくなりつつある。Boston Globeの記事によれば、大学を卒業した者のうち最貧困層の占める割合は、1970年と2013年で比較すると6%から9%に上昇しているが、同じ期間の最富裕層の比率は44%から77%と比較にならないほど上昇している。最貧困層から入学してきた学生の多くが卒業できないという厳しい現実がある。Christine Armario, “Finishing college a growing divide between rich, poor, study says Lower-income rates near static; For the well-off, graduations soar”, 2015 April (<https://www.bostonglobe.com/news/nation/2015/02/04/study-finishing-college-growing-divide-between-rich-poor/jurAZkGdtIEg6VwnozPPKI/story.html>) を参照。また、最貧困層からエリート大学に進学した学生がキャンパス・ライフで直面する様々な課題については、Maggie McGrath, “The Challenge Of Being Poor At America’s Richest Colleges”, 2013, Nov. (<http://www.forbes.com/sites/maggiemcgrath/2013/11/27/the-challenge-of-being-poor-at-americas-richest-colleges/>) を参照されたい。
- 14 アメリカにおいてリベラルアーツ教育の重要性が再認識されつつあることについては、William Deresiewicz, The Disadvantage of an Elite Education—Our best universities have forgotten that the reason they exist is to make minds, not careers -, The American Scholar, 2008 Summerに詳しい。その中で著者は現在のリベラルアーツ教育が抱える問題を次のように述べている。“Although the notion of breadth (of knowledge) is implicit in the very idea of a liberal arts education, the admission process increasingly selects for kids who have already begun to think of themselves in specialized terms — the junior journalist, the budding astronomer, the language prodigy. We are slouching, even at elite schools, towards a glorified form of vocational training.” 〈 〉内は引用者。

2015年6月2日 同志社スピリット・ウィーク春学期  
京田辺校地「講演」記録

<HPでは写真等を省略しております。詳細は冊子体の『Doshisha Spirit Week講演集 2015』をご覧ください。>